

平成 22 年 4 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間 2006 ～ 2008

課題番号：18520329

研究課題名（和文） ギイ語談話文法の研究と言語資料の統合・電子化の試み

研究課題名（英文）

A study on G|ui discourse grammar with integrating computerized linguistic data.

研究代表者

大野 仁美（ONO Hitomi）

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：70245273

研究成果の概要（和文）：

この研究では、これまで散発的に収集されてきたギイ語（コイサン諸語・中部コイサン語族、ボツワナ国）の文法資料・テキスト資料の電子化を進めた。その資料にさらに新規に現地調査で収集した資料を加えて、談話レベルでの文法現象の研究を行った。主に、さまざまな文法要素の出現位置や語順といった形態統語論的な分析を行ったのに加え、会話の分析において話し手と聞き手のあいだにある社会的関係の違い（いわゆる冗談・忌避関係）が用いられる言語形式や文体に大きく影響を与えることを考察した。

研究成果の概要（英文）：

This study is a morphosyntactic investigation of the G|ui language (a Central Khoisan language spoken in Botswana) at a discourse level. The linguistic data being used for the analyses, such as grammatical notes and speech text that had previously been collected, was computerized, and new data was added through field research conducted during the research period. The main focus of the study was put on describing the variations of word order and the position and mobility of grammatical particles. This study also found the existence of speech styles varied according to the social relationship between a speaker and a hearer, namely so-called joking and avoidance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：3001

キーワード：コイサン・ギイ・談話文法・語用論

1. 研究開始当初の背景

コイサン諸語はおそらく世界の言語の中でもっとも言語学的記述が進んでいない言語群であり、その希少性と末期的話者人口ならびに類型論的位置づけを考えると、さまざまなレベルでの記録が急がれている。中部コイサンの文法研究は、最大数の話者を有するナム語以外（主に Hagman と Haacke による）はそれほどあるいは全くなされていなかったが、PGN 辞（後述）を有する等いくつかの共通の文法的特徴が存在すると理解されてきた。90 年以降中川裕東京外国語大学教授によって日本語でグイ語の文法記述がなされ、グイ語においては PGN 辞が格を発達させている（他の中部コイサンでは見られない）という主張がなされ、グイ語は主語がモダリティーを encode するという事実（通言語的に非常に稀）が報告された。これらは比較的似通っているとされてきた中部コイサンにおいてグイ語が特異な位置を占めることを意味するいくつかの例のうちの 2 つである。しかしこの段階ではいずれも中川教授が調査して明らかにした事実の一部の報告に過ぎず、これらの現象を含め、観察対象を文から談話へ拡大した詳細な文法を記述することは中部コイサン研究を進めるためにもまた一般言語学的にも意義のあるものと考えられた。また、これらの言語自体へのアクセスが容易でなく、特にグイ語話者はモノリンガルであることから、この言語の資料を収集するのは困難な作業であると言える。それでも 60 年代から日本の人類学者が、90 年代からは言語学者が現地調査を行いグイ語の資料を積み上げてきた。その中にはまだ解決を見ず公表されていない文法資料から、録音されたまま保存されている音声資料、人類学的な目的に合わせてトランスクリプトされた会話資料などが存在する。複雑な音韻体系を有するため、これらは録音さえしておけばいつか誰かが書き起こせるといったことが期待できる資料ではなく、それだけではトランスクリプションがほとんど不可能である。これら研究者の間に散在する資料を統合し、トランスクリプトされていないものは書き起こし、電子化することは将来の大きな財産になることが予想できた。

2. 研究の目的

この研究の目的は、上記 1. で述べた重要性を背景に、グイ語（中部コイサン）において文を超えたレベル（いわゆる談話レベル）を対

象としないと分析できないいくつかの形態統語論的現象を明らかにすることである。具体的には、格標識の省略やフォーカスと語順の相互関連など文脈によって変化する情報の提示に関わる現象と、二つの節を連結して表現されたり語りなどの文体で出現するモダリティーとの大きく二つの項目がある。同時にこの作業を進めるにあたって必要となる言語データを得るために今まで収集されて来たグイ語の数種の言語資料を統合し今後のさまざまな研究目的に合わせてアクセスが容易になるような形式で電子化を行う。

3. 研究の方法

本研究は以下の手順ですすめられた：

- (1) 既に収集されていた言語資料を利用して、形態統語論的分析を進める。その際にそれらを電子化する。
- (2) 既に収集された資料では扱われていない現象や新たな課題については現地調査を行い、代表者が直接一次資料を収集した。これは主に、テンス・アスペクト・ムード (TAM) をあらかず小詞、主に文末に用いられ多機能を有するとされる小詞の出現の有無と出現位置を明らかにするためのものである。
- (3) 上記を通して得た分析を学会やシンポジウムにおける発表および研究者を訪問しておこなった情報交換によって進める。
- (4) また、会話テキストを分析するにあたり、文体差および用いられる言語形式の差を解釈するために、話し手と聞き手とのあいだの社会的関係の理解が必須であることが明らかになった。そこで、それがどのように決定されるかについて、既に研究代表者が収集していた資料をもとに詳細な記述を行った。

4. 研究成果

ここでは、まず次項「5. 主な発表論文等」にあげた成果について順次その概要を述べ（(1)～(6)）、次にそれ以外のものについて、今後の展望とともに述べる。

- (1) 「グイ語会話における冗談忌避関係」
この論考では、既に収集されたテキストをもとにグイ語話者による会話（自由会話ではなく、場面を設定して行ったもの）を、話者間

の社会的関係を分析要素として考察した。これまでグイ語会話は人類学的観点からそのダイナミクスや構造が分析されてきたが、(現時点で可能な限りの) 妥当な言語学的分析を基礎に、社会的関係によってどのような変種が用いられるかが考察の対象となったことはない。また、冗談忌避関係が汎コイサンの特徴であると言われているにも関わらず、それがどのように会話に反映されるかを対象とした研究も国際的になされていない。したがってこのテーマに関しては、より詳細な分析を可能とする新規の談話資料を急ぎ収集し、早い段階で国際学会での発表を実施しそれを文章化することが重要であると考えている。

(2) “PGN markers and case markings in G!ui”

中部コイサン語の歴史比較を考察する上で最も重要な項目である PGN(person, gender, number) 辞について、特にグイ語においては主語とその周辺がそれが含まれる文のタイプを示すという類型論的にめずらしい現象を有することを中心に、国際学会で発表した。これを論文化したものは、国際的な媒体に投稿中および投稿準備中である。

また、PGN 辞の歴史的变化の筋道を明らかにするのは、中部コイサン語族全体の歴史を考察する上で、最も重要なもののひとつであるが、それに関してはコイサン諸語自体の系統分類の再考察という新たな着眼点のもとに、新規の研究プロジェクトへと発展した。

以下(3)・(4)の国際学会および国際シンポジウムでの発表は、グイ語会話の語用論的分析をするにあたって必要とされる、話者にとってだれが冗談関係にあたり、だれが忌避関係にあたるのか、を明らかにするための研究である。

(3) “Two types of kinship categorization found among Central Khoisan languages.”

中部コイサンの親族名称体系において、キョウダイがカバーする範囲は、平行いとこや「親の交叉いとこの子」などをふくむ広いものである。そのうち、だれがアニ・アネで、だれがオウト・イモウトになるかを決定する規則は、当事者間の年齢差による場合と、それ以外の(たとえば平行イトコのばあいはキョウダイである親同士の間関係)ものによる場合の2種が存在する。この発表ではその規則を明らかにすると同時に、それが親族名称体系全体とどのように有機的に関連しているかをあきらかにした。

この研究は、グイ語会話の語用論的分析にとって重要な、だれがだれのキョウダイにあたるのかを明確にする基礎的情報を提供すると同時に、中部コイサン語族が他のコイサンとどのように歴

史的に接触してきたかを考察する際に必要な事実を提供する。

(4) “Crossness in kinship categorization.”

親族名称体系のうち、いわゆる bifurcate merging 型の4つの下位タイプについて考察した。グイはそのうちのひとつである。それぞれの分類の論理と、それが社会システムとどのように有機的に関連しているかを明らかにした。

次の(5)は、研究実施期間中現地調査実施の際に訪問したボツワナ大学で行った現地の言語学者との情報交換を通じて得た知見をもとにしたボツワナ国での社会言語学的状況をのべたものである。

(5) 『多様な言語と言語政策』

話者が極端に少なく絶滅の危機に瀕しているコイサン諸語のみならず、公用語のツワナ語を含む多数派のバントゥーまでもが言語学的に「健全」な状態にあるとは言えない厳しい状況を一般読者にむけての媒体で記すことができた。

(6) 「言語人類学から見たポライトネス理論」

グイにおける冗談忌避関係を、ポライトネス理論を用いて模式化したものである。日本語の敬語にみられるような、ネガティブポライトネスのみを制度化した体系とは対照的に、ネガティブポライトネスとポジティブポライトネスの両面が制度化されていること、およびグイにおいてはポジティブポライトネスは必須ではなくオプションであることをモデルに盛り込んだ。

(7) 電子化された資料

談話資料に関しては、随時公開してゆく予定である(一部は大野(forthcoming)で公表)。文法調査の際に収集された「文」に関しては、将来的に公開することを目指し今後データベース化することを計画している。

(8) TAM の位置と移動性について

新規に実施した調査によって、グイ語の TAM の移動性が高いこと、またその移動性の相違からムードの小詞が文法的に2種に分かれることを明らかにした。

(9) 文末に出現する小詞 *ʔa* について

この項目は、中部コイサンにおいてさまざまな機能を有するものとして記述されていることから、グイ語における共時的記述をさらに発展させて他の中部コイサン語との比較研究へと進展させつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

大野仁美「グイ語会話における冗談忌避関係」『麗澤大学紀要』90、ページ未定 (forthcoming)

〔学会発表〕(計3件)

ONO, Hitomi “PGN markers and case markings in G|ui” World Congress of African Linguistics (WOCAL) #6. 20090817, University of Koeln.

ONO, Hitomi “Two types of kinship categorization found among Central Khoisan languages.” The International Conference of the Global COE Program “Corpus-based Linguistics and Language Education”, A Geographical Typology of African Languages jointly with an International Workshop on Khoisan Linguistics, 20090514, TUFs.

ONO, Hitomi “Crossness in kinship categorization.” The 3rd International Symposium on Khoisan Languages and Linguistic: Khoisan Languages an Endangered World. In memory of Professor Anthony Traill, 20080707, University of Frankfurt.

〔図書〕(計2件)

大野仁美『多様な言語と言語政策』池谷和信編『ボツワナを知る50章』明石書店、ページ未定、(forthcoming)。

大野仁美「言語人類学から見たポライトネス理論」『敬語の語用論的研究：理論的枠組みの構築と用例調査による検証』49-55。(平成16-18年度科研費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書、研究代表者滝浦真人麗澤大学助教授, 2007.

(1)研究代表者

大野 仁美 (ONO Hitomi)
麗澤大学・外国語学部・教授
研究者番号：70245273

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

6. 研究組織